



疑いと誘惑の論理学

「李下に冠を正さず」に見る人間性の本質

行動の戒めから、場所の回避へ。論理的な整合性の分析と新たな行動原則の提案。



古人の教え：潔白の証明

李下 (Rika)



李下に冠を正さず
(スモモの木の下で冠を直さない)
意味：疑わしい行動を避ける

瓜田 (Kaden)



瓜田に履を納れず
(瓜畑で靴を履き直さない)
出典：『文選』君子行

潔白な人ほど、誤解を招く行動を慎むべきという伝統的な教え。

論理的不整合の発見

李下 (Plum Tree)



行動説明

特定の動作（手を上げる）を禁止

分析

場所には留まっているが、
動作だけを制限している。

瓜田 (Melon Field)



行動説明

状況への介入（踏み込む）を禁止

分析

場所そのものへの
境界線を意識している。



なぜ基準が違うのか？

詩としての「韻（ライム）」を優先した結果、論理的な並行性が損なわれている可能性。

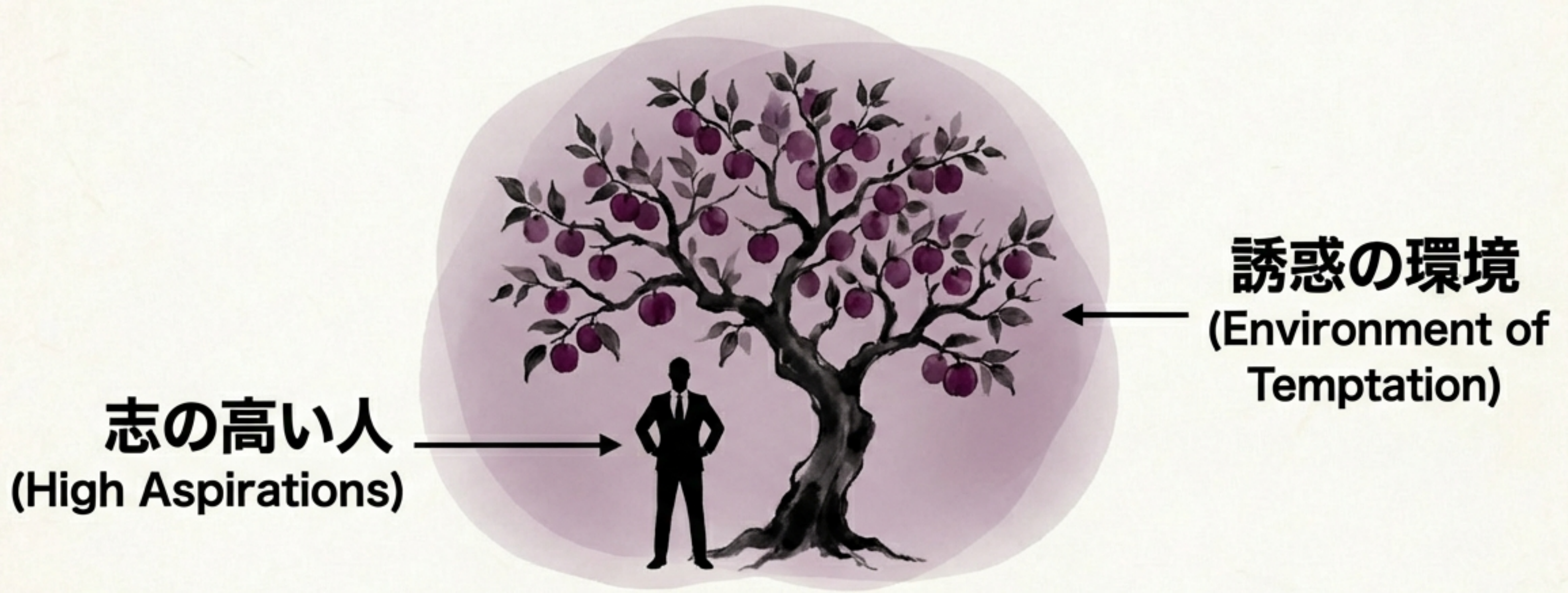
人間は弱いものである

金銭財産
性的誘惑
権力
社会的優越
食欲

倫理観を持っていても、
これらの誘惑には
簡単に屈してしまう。

「自分は大丈夫」という過信
こそが最大の弱点である。

志と環境のパラドックス

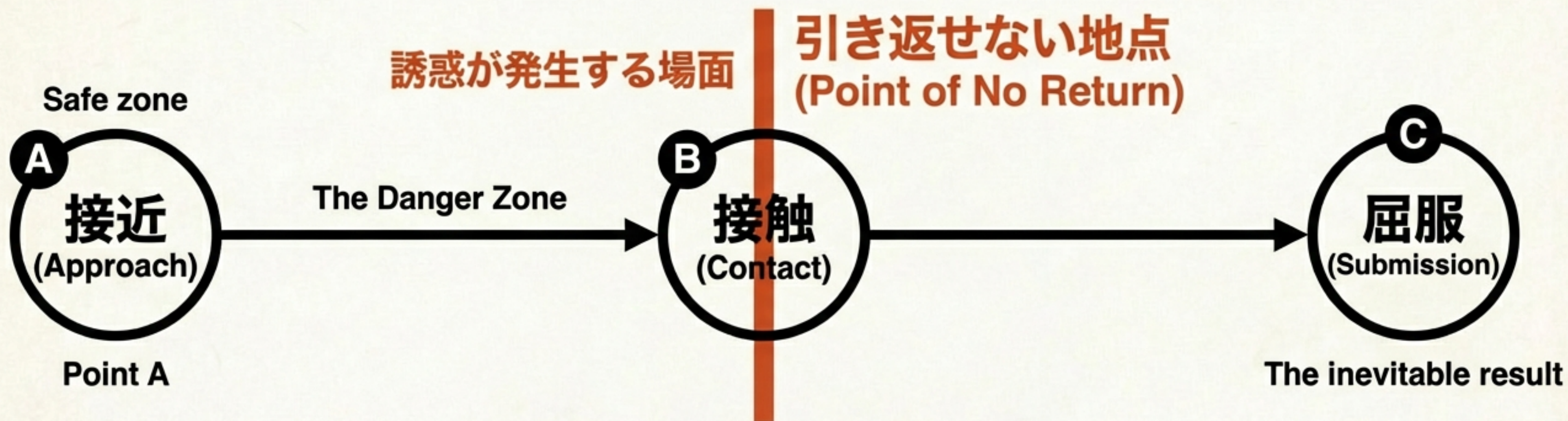


「李下に冠を正さず」の限界

この教えは、誘惑の直下に身を置きながら、意思の力で抵抗することを求めている。

しかし、環境の力は意思の力より強い。

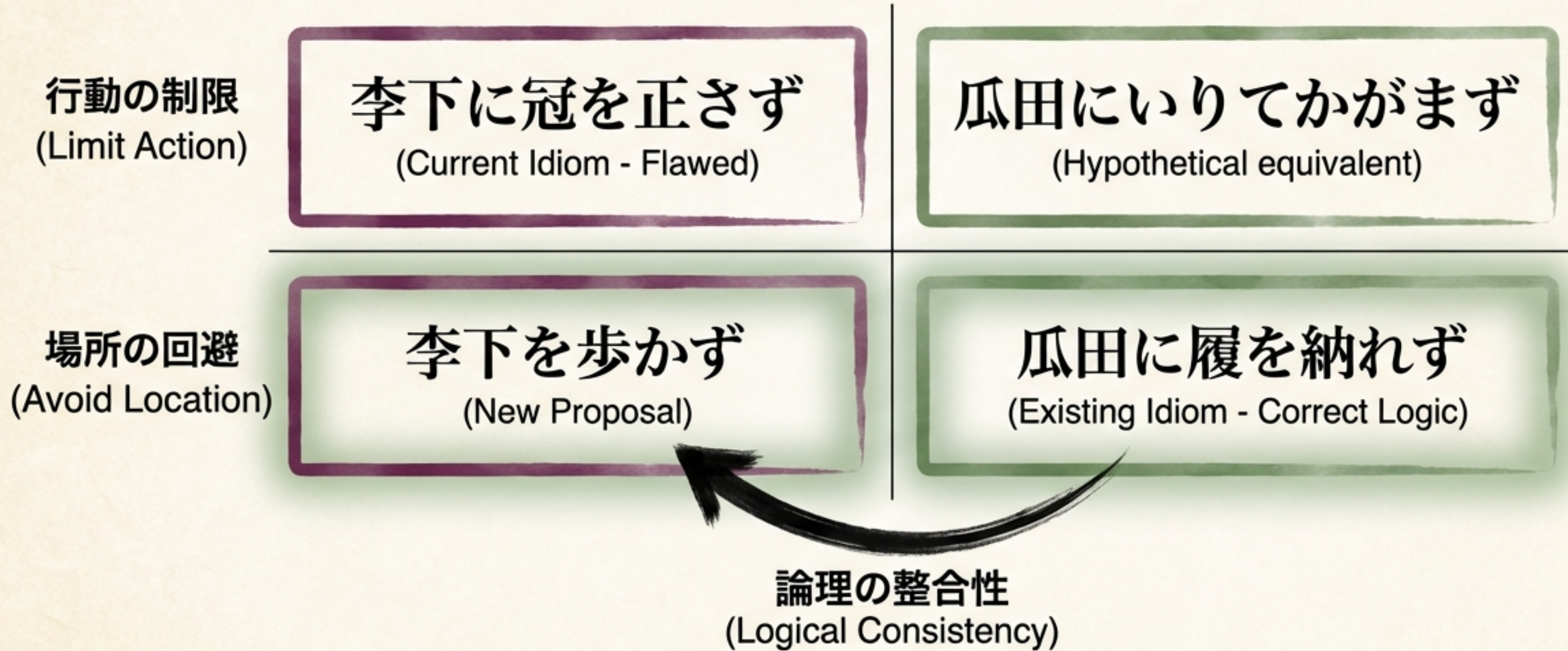
引き返すことの難しさ



「誘惑が発生する場面に行ってしまったら、
引き返すことは難しい」

← 防御策は『予防』しかない。

修正案：行動ではなく場所を避ける



「瓜田」の教えに合わせて、「李下」の教えも『場所の回避』に書き換えるべきである。

新しい戒め

「瓜田に履を納れず
瓜田に履を納れず」

「李下を歩かず」



完全な回避
(Total Avoidance)

遠回りをする知恵



誘惑が発生する場所そのものを回避する知恵が必要である。
「遠回り」は非効率ではなく、高潔さを守るための生存戦略である。

誘惑を管理するな、回避せよ



1

論理の修正

詩的な表現の不整合を正し、行動管理から環境管理へ思考をシフトする。

2

人間性の受容

意志の弱さを認め、戦わずして勝つ（避ける）ことを選ぶ。

3

接近の回避

最大の防御は、冠を直さないことではなく、その木の下に立たないことである。



李下を歩かず